

# 母が産み、父が育てるペンギンの命

松本侑壬子・ジャーナリスト

南極の人気者と言えば、まずペンギン。レッサーパンダなんてメじゃない、その立ち姿の安定感、とりわけ皇帝ペンギンは、その名の通り、歩く姿の堂々振り（ちょっとユーモラス？）には、威厳すら漂っている。でも、彼・彼女らがこれほど厳しい試練を乗り越えて子どもを生み育てていることは、5年がかりの撮影の結晶である本作を見るまでは誰も知らなかったのではなからうか。

3億5000万年前の氷で覆われた南極大陸。冬の気配が忍び寄り始めた3月のある日、皇帝ペンギンたちは一斉にそれまで暮らしていた海辺を離れ、100キロも離れた内陸部の営巣地へと移動を始める。気温マイナス40℃の白一色の氷原を一列に並んで粛々と歩き続ける。隊列から離れた者は、二度と仲間の元に戻れず野たれ死するしかない。

旅の目的はただ一つ。子どもを生み育てるためである。住み慣れた海辺には外敵もいて、安心して出産・育児をするためには、苦しい大移動に耐えて氷山に囲まれた安全な場所オアモック（氷丘のオアシス）へ移動しなければならない。短い足を不器用に動かし、時には転んだまま自らの腹を使ってそのように滑りながら、少しずつ進む。超望遠レンズでとらえた地平線上をゆっくりと進む“皇帝たち”の行列は、例えば、明治の軍隊史上最大の雪山遭難事故を描いた映画『八甲田山』の一場面を思い出させる。まさに命がけの行軍だ。これほどの壮絶な繁殖活動を行うのは、数あるペンギンの中でも皇帝ペンギンだけだという。

営巣地には、不思議なことに大陸各地からほぼ同時期にペンギンたちの隊列が続々と到着する。

目の届く限りタキシード姿の恰幅のよい“紳士たち”の群れ。いや、その中にはほぼ同数のレディたちがいる。芋の子を洗うほどの混雑の中からどうして“唯一のパートナー”を選び出し、互いにライバルから勝ち取り、たった1個の卵を産み出すのか。生命の不思議は、ひとたび夫婦となり、5月の終わりには父親と母親となったカップルの息をのむほどの子育てへの献身の姿を見守るうちに、その愛の強さへの感動へと導かれていく。

動物行動学者であるリュック・ジャケ監督は、4年間の準備期間を経て南極で8,880時間分のフィルムを回したという。圧巻は、父親の子育ての姿である。産卵のため体重の5分の1までを失った母親ペンギンは、自分自身とわが子の命の糧を求めて氷原の彼方の餌場をめざし、再び隊列を組んで出発する。留守を預かる父親は、卵を足の間に抱えて羽毛で包み温めながらひたすら孵化のときを待つ。日照時間2時間の暗い酷寒の中を時速250kmの激しいブリザードが襲う。まるでフットボールの試合のようにスクラムを組み、互いに体を温め合いながら踏ん張る父親たちの苦行は2ヵ月以上続く。その間、立ったままである。

そして、ようやく父親ペンギンの足元から雛たちが元気な産声を上げるころ、氷原の彼方から母親たちの一団が姿を現す。たっぴりと胃袋に食べ物を蓄えて一直線に夫とわが子の元へ戻ってくる。

既に4ヵ月間、少しの雪以外口にしていない父親は、最後の力を振り絞って元気で頼もしい母親にわが子を手渡す。頑張ったパパに「子育てご苦労さん！」と声をかけたい気になる。



フランス映画(86分)／リュック・ジャケ監督

## 『 皇帝ペンギン 』

7月16日、恵比寿ガーデンシネマにて先行上映。7月23日より全国拡大公開。

